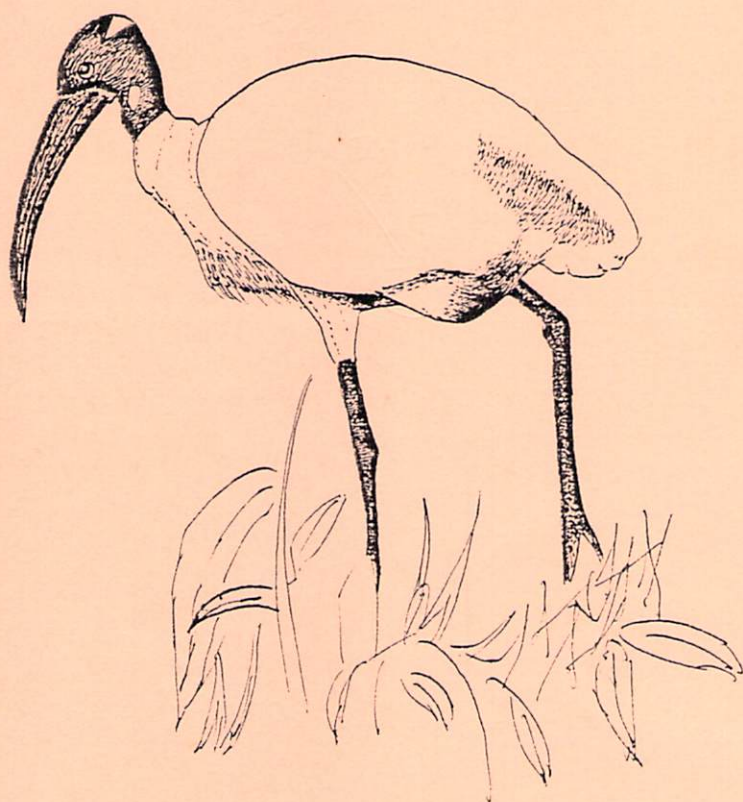


HITOTSUBATAGO No. 3

# ヒトツバタゴ



長崎県生物学会対馬支部報

December

1985

フクリンオニユリの発見  
国分英俊・岡部虎男

1981年3月26日、美津島町今里でツシマジカの調査のおり、偶然にもフクリンオニユリを発見したので報告しておく。

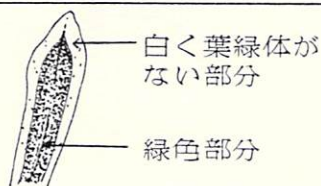
日本に自生しているオニユリは、3倍体のものがほとんどであり、当然のことながら種子はできないとされている。したがって、繁殖は珠芽(ムカゴ)か木子であり、栄養繁殖のため変化のある花、フクリン等はほとんど生じることはない。ところが、1978年の野田昭三氏の「対馬のオニユリ2倍体、3倍体とオウゴンオニユリの分布」によると、対馬に自生するオニユリの約75%は2倍体、あとの25%が3倍体であるとしていることから、このフクリンオニユリは、2倍体種子による突然変異により生じたと考えられる。

発見したときは2枚葉で育つかどうか心配したが、岡部が工夫を重ねた結果、1985年7月に開花をみることができた。花は普通花であった。オニユリのフクリンは、日本ではこれ一本であると思われるので大切にしたい。

繁殖は極端に悪く、珠芽はつくもののほとんどは葉緑体をもっておらず育たない。ただ、これを親として変化のあるオニユリを作出することも夢ではないと考える。

( 巖原中学校 )

フクリンとは葉の両はしの部分の葉緑体がねけ、まん中のみ緑色をしているものをいいます。特にフクリンが珍重されているものにカンラン、シュンランがあります。 — 国分 記 —



アオサギの生態  
(*Ardea cinerea jouyi* Clark)  
EASTERN GREYHERON



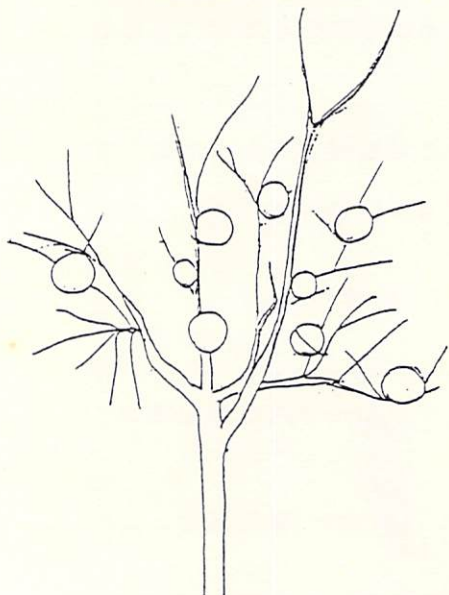
平山 俊章

形態： 巨大なサギで背面灰色、翼青黒色。嘴峰107 ~ 130 mm  
・翼長417 ~ 475 mm・尾長157 ~ 188 mm・ 137 ~  
172 mm、後頭に青黒色の長い飾羽あり、前頭には青黒色  
の縦はんがある。そのほかの頭頸部と下面とは白、幼鳥  
は、後頭の飾羽を欠く。

生態： 全国に分布し、まれならず。水田、沼沢地、池畔に生  
息し、主として魚類・カニなどを捕食する。飛行は緩慢  
で、グワー、グワーとなく。集団で営巣する。

(保育社「原色日本鳥類図鑑」より)

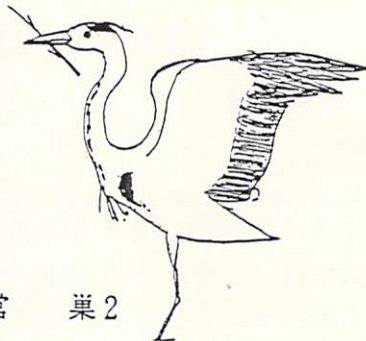
集団で営巣するのは、美津島町樽ヶ浜に近い小さな山の一  
部で、その谷あいに残された原生林に、およそ40羽の  
アオサギが集まってくる。巣は、原生林の中でも特に、よ  
く枝をはった、しかも20mあまりの背の高い木を選んで  
いる。巣は円形で、その直径はおよそ60~70cmで、  
小枝を編むようにして作っている。木によっては、9個も  
の巣が掛けられているものもある。(営巣1)



営 巣1

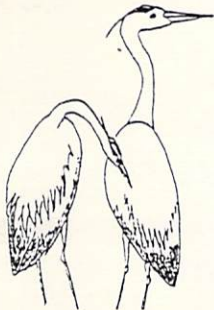


営

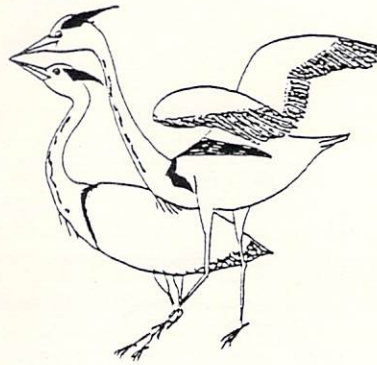


巣2

1月下旬～2月上旬になると、どこからともなく数羽のアオサギがこの地に集まってくる。アオサギの巣はとても丈夫で、昨年のもを補修して使う場合が多いようである。しかし同一個体が昨年と同じ巣を使用するかどうかは明確でない。オスが、巣材である小枝を運んでくると、巣で待っていたメスはこれを口ばしで貰い受け、巣に編み込みながら補修していく。補修は、<sup>(営巣)</sup>単なる補強のためだけでなく自分たちの体型にあった形に直すためでもあろうと考える。



羽づくろい



交尾1

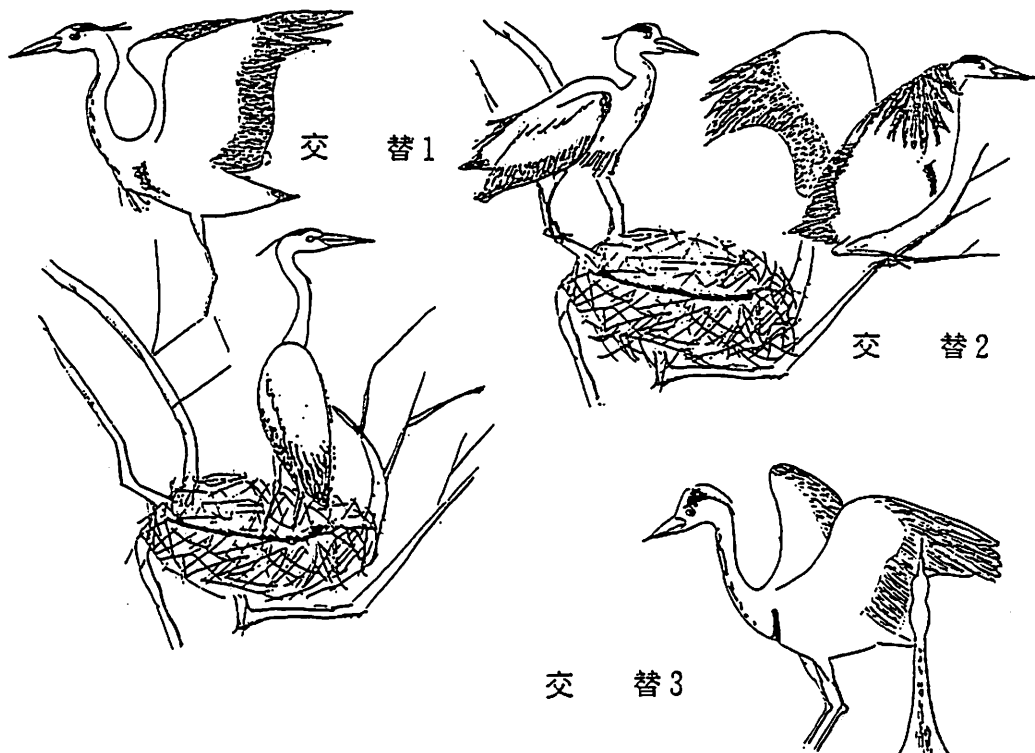
繁殖期（2月下旬～6月下旬ごろ）になると、オス・メスとも口ばしのもとの方が鮮やかな赤色を帯びてくる。この時期になると、オスはメスの羽づくろいをする行動が見られるようになる。これは、交尾への誘いである。（羽づくろい）

オスはやがてメスの背中の上に乗ろうとする。メスの欲求も高まっている場合はそのまま交尾にいたるが、そうでない場合は、オスが背中の上に乗ることを拒む。交尾は、夜間に限らず行われる。（交尾1）



オスは、メスの首を口ばしではさみ、それから足を曲げ、尾と尾を近付けて交尾を行う。この行動で、オスがメスの首を噛むのは、メスがあまり動かないようにするためと、安定の悪いところにいる自分の姿勢の維持のためとおもわれる。交尾中、メスは大きな鳴き声を出すことが多いが、近くにいる他の個体はあまり関心を示さない。このようにして、繁殖期になると、営巣地は一段と賑やかになる。(交尾 2.3)

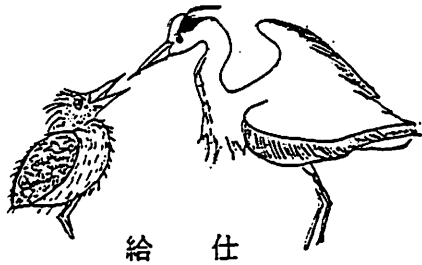
卵の大きさは、ほぼニワトリの卵と同じ程度で、キジの卵の色に似て淡い緑色をしている。産卵数は、3～4個ぐらいだが、無事巣立っていくのは、そのうちの半分程度である。



卵や雛は、オスとメスが交替で温める。餌場が遠い上に、餌取りも容易ではないため、交替相手が帰ってくるまで3～4時間巢に座ったままであることもめずらしくない。餌取りから帰ってきた個体は、巢の中でなく巢の近くの枝に降りる。巢で帰りを待っていた個体のなかには、この時(交替1)空に向かって鳴く行動を見せるものもいる。それは、あたかも無事の帰巢を喜んでいるようにも見える。(交替3)やがて、巢にいた方の個体が枝先に進み、飛びた(交替2)ていく。先ほど帰ってきた個体は、空いた巢の中へと進み、卵や雛の位置を直しながらしゃがみこむ。

雛は、口ばしも体の色も青黒色をしている。親鳥が餌場から帰ってくると、鳴きながら餌をねだる。親鳥の口ばしにとどく時には、自分の口ばしでそれを噛むことを繰り返す

餌を要求する。親鳥は、このままの状態でも餌を口移しに与えることもあるが、巣の中に肉片らしきものをもどして与えることもある。これは、雛の成長や体調により変わるものと思われる。(給仕)



給 仕



外 敵

下からの外敵としては、テン・イタチが考えられるが、あまり糞を見ないことや、巣がかなり高い所にあることからあまり心配でない。ところが、営巣地の上空にはいつも、トビが数羽飛び回っており、雛を狙っている。何かの理由で親鳥がいなくなったすきを狙っているようである。しかし、トビの中には親鳥がいても平気で雛に襲いかかるものもいる。この場合、親鳥はトビへの威嚇のためか、恐怖を感じてか、頭の飾羽を逆立てて警戒音を出す行動をとる。中には、恐怖のためか巣を離れる親鳥もいて、雛はあっそう危険にさらされる。(外敵)

威嚇は、頭の飾羽を逆立て、激しく鳴きながら相手をつつこうとする行動で表現されるが、相手に直接けがをおわせるような攻撃はしない。巣を留守にしている間に他の個体が侵入している場合には空からいきよよく飛びかかっていくが、侵入者はすぐに退散するし、追う方も深追いはしない。



威 嚇



竹敷

営巣地

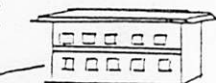
空港

樽ヶ浜

湿地

湿地

小学校



営巣地から餌場に向かうコースはだいたい決まっており、  
鶏鳴小学校の上空を経て根曹のほうへ飛ぶコース、樽ヶ浜  
の上空を経て竹敷や大船越のほうに飛ぶコースである。



